

(別紙様式3)

令和4年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1  
管理機関名 学校法人中村学園  
代表者名 理事長 中村 量一

令和3年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和3年5月11日（契約締結日）～令和4年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 中村学園女子高等学校  
学校長名 奥井 裕紀子

3 構想名 「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成

4 構想の概要

これまでのSGH事業の成果をさらに発展・充実させながら、地球規模の課題「食」に関わる探究活動による課題解決を通じてSociety 5.0をたくましく創造的に生きる人材を育成する。ここで扱う「食」の課題は、食に関わる4領域（社会文化・環境・経済・栄養）及びSDGsのターゲットである。この教育的基盤となるALコンソーシアムを組織し、拡大と発展を図りながら、広く生徒たちに高度な学びの機会を提供し、より多くのイノベティブなグローバル人材を育成する。育成過程において、文理融合型のカリキュラムやイノベーションスキルの育成法・評価法、生徒の多様な目的や課題に対応した国内外の研修先の開拓、留学生との協働を最適化する実践プログラム、大学教育の先取り履修による高度な学びの提供方法等の開発へ特に注力することで、「食」を切り口として新しい価値を創造し、グローバル・イノベーターを育成するための教育プログラムのスタンダードモデルを創りあげる。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和3年5月11日～令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会開催	委員 依頼			← 連絡・調整 →			14日 開催			← 連絡・調整 →		12日 開催

AL ネットワーク連絡会開催										連絡・調整	12日開催
検証委員会開催						連絡調整	7・21日開催			連絡調整	17日開催
留学プログラム参加支援			説明会 エントリー	一次選考		二次選考 結果通知					
事業評価の実施						生徒アンケート実施			生徒・教員・学校アンケート実施		
財政支援									GI 留学支援金支給		

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a. 管理機関の下、拠点校を中心に組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況

本事業では、次の表に示すAL ネットワーク組織を整備し、研究開発と実践を進めた。

区分	機関名・学校名	コンソーシアムにおける主な役割
管理機関	学校法人中村学園	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 事業全体の統括</li> <li>▶ 業務執行体制の管理と整備</li> <li>▶ AL ネットワーク内の連絡・調整</li> <li>▶ 必要経費の管理と執行</li> <li>▶ 運営指導委員会・AL ネットワーク連絡会の開催</li> <li>▶ 事務局からの情報の発信・収集</li> </ul>
事業拠点校	中村学園女子高等学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 「GI 探究」「グローバル探究」の開発と実践</li> <li>▶ 文理融合型選択制を導入したカリキュラム開発</li> <li>▶ カリキュラム検討委員会の開催・調整</li> <li>▶ 国際会議「食のサミット」の開催・調整</li> <li>▶ 成果報告としての「WWL 報告会」の開催・調整</li> <li>▶ 事業連携校と相互に参加する機会の調整・実施</li> </ul>
事業連携校	中村学園三陽高等学校 京都先端科学大学附属高等学校 高知県立高知西高等学校 SMK Sultan Ibrahim Girls School (マレーシア) 84 <sup>th</sup> School (モンゴル) Academic of Lyceum Westminster International University in Tashkent (ウズベキスタン) 信男教育学園高等学校 (中国)	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 探究授業・成果報告会・国際会議への相互参加</li> <li>▶ 研究開発に関する情報交換</li> <li>▶ AL ネットワーク連絡会への相互参加</li> </ul>
事業協働機関	立命館アジア太平洋大学 九州大学共創学部 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 中村調理製菓専門学校 中村国際ホテル専門学校 ハワイ大学 KCC ウェストミンスター大学 マーセッド大学 マレーシア工科大学 SG インキュベート株式会社 株式会社リンガーハット	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 研修スタッフとしての学生の斡旋・協力</li> <li>▶ 研究発表イベントの参加奨励と指導・助言</li> <li>▶ アドバンスト・プレイメントの実施と整備</li> <li>▶ 高度な教科指導への協力・指導・助言</li> <li>▶ 探究活動・アントレプレナーシップ研修への講師派遣</li> <li>▶ 論文作成の指導・助言</li> <li>▶ AL ネットワーク連絡会への参加</li> <li>▶ 学校説明会の開催と進学準備の相談対応</li> </ul>

	株式会社久原本家グループ 国連 WFP 協会 NPO 法人 Table For Two	
カリキュラム アドバイザー	筑波大学人間系 准教授 國分麻里 氏	▶「GI 探究」「グローバル探究」等カリキュラム 全般に関する指導・助言 ▶カリキュラム検討委員会への参加
海外交流ア ドバイザー	学校法人中村学園経営企画 室 伊東正子 氏	▶留学希望者への支援、管理機関との調整 ▶海外研修プログラムの企画・調整 ▶国際会議での海外連携校との連絡・調整

#### b. 管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況

本事業が円滑および適切になされるよう、必要に応じて事業拠点校の担当者と連絡を取り、情報の収集と伝達を行った。特に事業拠点校と連携校の担当者間では、密にメールや電話での連絡を取り合い、情報を共有し相互の事業を円滑に進めることができた。それ以外にも年度末（3月12日開催）のALネットワーク連絡会における事業実績の年度報告や課題、今後の展望等を共有し意思疎通を図った。また、連携校でもあり、WWL事業カリキュラム拠点校でもある京都先端科学大学附属高等学校のALネットワーク連絡会にも出席するなど、他校の情報共有体制の知見を積極的に取り入れるよう努めた。さらに、事業拠点校ではホームページにWWL事業の関係行事をタイムリーに掲載する等、情報公開を継続して行った。

#### c. 管理機関の長、拠点校等の校長が果たした役割

構想内容の水準を維持し必要な改善を図るために、管理機関は積極的な情報収集と適切な指示を事業拠点校へ向けて発出した。また、事業拠点校は、管理機関からの指示を受け、カリキュラム開発を計画的・組織的に実施した。

管理機関の長である学校法人中村学園理事長は、事業責任者としてALネットワーク組織を適切に管理し、総括長である副理事長へ指導・助言を行いながら事業構想の深化へ向けて必要な改善を図った。総括長は、管理機関長の指示を受けて、運営指導委員会や検証委員会を招集し、ALネットワーク組織のより強固な協力体制の構築を図った。また、事業拠点校への適切な指示により、事業の進行全体を調整した。

事業拠点校の校長は、リーダーシップを発揮して校内および連携校との諸活動が円滑に進むよう、連携校の校長とも連絡を取りながら、事業の管理を行った。また、校内の執行部に当たる教育開発部への指導・助言および業務の遂行について監督を行った。

#### d. 運営指導委員会の開催実績や事業の検証資料等の収集状況

[運営指導委員会の構成]

区分	構成員氏名	所属	役職
委員長	岩本 仁	学校法人福岡成蹊学園	理事長
委員	小野 博	グローバル人材育成教育学会	理事長
	新澤 和幸	福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局	参事補佐
	末松 大和	NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡	専務理事
オブザーバー	相川 洋	SG インキュベート株式会社	代表取締役社長
	河邊 哲司	株式会社久原本家グループ本社	代表取締役社長
	副島 雄児	国立大学法人九州大学共創学部	教授
	米濱 和英	株式会社リンガーハット	名誉会長

〔開催実績〕

回	日時	内容
1	令和3年10月14日 (木) 13:30～15:00	事業の概要、ALネットワーク組織、育成する人材像、今年度の重点項目、進捗状況、事業拠点校への指導・助言
2	令和4年3月12日 (土) 14:00～15:30	今年度の事業総括、事業達成状況、事業の検証結果、次年度への課題と計画、次年度の目標達成に向けての事業拠点校への指導・助言

〔検証資料〕

検証項目	評価対象	資料名
WWL 事業進捗状況	事業拠点校	令和3年度年間行事一覧
事業全般を通じて育成する資質・能力	事業拠点校生徒（全学年）	WWL 事業効果検証生徒アンケート結果
探究授業、主に「GI 探究」で育成する資質・能力	GI クラス生徒（1年次）	ループリック評価表・結果
「GI スキルアップセミナー」で育成する資質・能力	GI クラス生徒（2年次）	生徒事後評価アンケート結果
英語力の向上	事業拠点校生徒（全学年）	英語検定試験資格取得調査結果
教師の授業改善への取り組み	事業拠点校教員（専任教員）	指導指標測定結果

**e. 拠点校等の卒業生の卒業後の進路とイノベティブなグローバル人材としての成長の過程を追跡調査する仕組み等**

事業拠点校の WWL 事業（旧 SGH 事業を含む）の対象となる SG クラスおよび GI クラス生徒の進路については、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定時（平成 27 年度）に入学した生徒より、追跡を実施している。基本的には、卒業時の担任によるデータの入力と更新を随時行うものである。現在、同窓会組織と連携してデータの取り扱いを行っていくことを検討中である。

**f. アジア高校生架け橋プロジェクトや海外連携校等からリーダー、架け橋となる留学生等の日本での学習や生活を支援する体制**

平成 30 年度より開始された「アジア高校生架け橋プロジェクト」については、事業拠点校が開始当初よりわが国で最も多くの留学生を受け入れている学校の一つであり、今年度も 10 か国から 10 名を受け入れた。留学生に対する日常の生活面はもちろんのこと、日本語学習や健康面の相談等においても、事業拠点校の教育開発部員や管理機関の海外交流アドバイザーが主に担当する体制をとり、計画的に親身な指導を行っている。また、公益財団法人 AFS 日本協会の博多支部とも綿密に連絡を取り、生活面の援助や事業拠点校で開催する諸行事を共同で実施している。

その他の留学生についてはコロナ禍中ということもあり、令和 2 年度から受け入れはできていない。

**g. 事業拠点校で取り組みについて、本事業による取り組みが学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況**

〔授業改善〕

事業拠点校では、毎学期末にすべての常勤教員を対象とした指導指標の自己評価の測定を行っている。この指導指標は、これから生きる生徒たちにとって必要とされる 21 世紀型スキル等の能力を習得するにあたり、教師が指導上改善すべき項目を事業拠点校で独自の基準を設け指標化したものである。この結果によると、令和 3 年度はコロナ禍の影響により対面授業とオンライン授業とを交互に実施した時期があったのにもかかわらず、指標 11 項目中の 10 項目で令和 2 年度を大きく上回る結果となった。しかもコロナ禍の影響が比較的少なかった令和元年度と比べても同様の結果である。このことから、事業拠点校の教員の授業改善に対する意識の向上や 21 世紀型スキルをはじめとする「生徒に身につけさせたい力」の共通理解が進んだ結果が良い結果を生み

出したものと予測できる。令和元年度から令和3年度までの測定結果（いずれも年度ごとの平均達成率〔%〕）は次の表の通りである。

大項目 ※（ ）内は指標項目数	令和3年度	令和2年度	令和元年度
A 授業の基本姿勢（5）	78.4	66.3	69.2
B 生徒の「深い学び」を促す授業への取り組み（4）	52.4	38.6	45.9
C 「生徒が学びの主人公」となる授業づくり（2）	84.5	70.1	38.4
全項目平均（%）	67.7	56.0	53.7

#### 〔生徒の意識〕

本事業により事業拠点校の生徒の意識の変化がどのように見られたかについては、年2回（令和3年度は6月・2月実施）の効果検証アンケートによって調査している。6月と2月の結果を比較すると、1年次に育成すべき「アイデンティティ」「グローバル関心度」「コミュニケーション力」「課題解決力」のいずれも学年全体としては肯定的評価が増加している。このことから、「GIフィールドワーク Basic（グローバル・キャンパス）」や「WWL 報告会」等の行事や、それらにつながる計画的な探究学習を通して身についた力に対して、成長を自覚し自信を深めているのではないかと考えられる。2年生についても学年全体としては同様の傾向が見られた。

#### h. アジア高校生架け橋プロジェクトの受け入れ国および人数

- ▶ 受け入れ国（アルファベット順）：バングラデシュ、カンボジア、フィリピン、インド、インドネシア、マレーシア、ミャンマー、パキスタン、タイ、ベトナム 計10か国
- ▶ 受け入れ人数：各国1名ずつ 計10名

#### 【財政等支援】

##### a. 管理機関が、本事業の運営に関わる経費を国からの委託経費のみではなく、自己負担額として、計画段階よりさらに計上したもの

- ▶ 留学プログラム実施に伴い、参加希望者13名の内、3名に総額150万円の渡航費用をGI留学支援金として支給した。（詳細はbに記載）

##### b. 事業の実施に必要な取り組みに対し、人的または財政的な支援や教職員を育成するための研修やセミナー等を実施した状況

###### ▶ GI留学プログラム参加者への支援

令和3年度に初めて留学プログラムが実施となり、それに合わせて参加希望者の内、3名に渡航費用の半額相当額（総額150万円）を支給した。この目的は、留学へ確固たる意志を持ち意欲ある参加希望者の経済的負担を軽減し、より良い成果をあげることを支援するものである。支援対象者の選考は、1次の書類選考を事業拠点校、2次の面接を管理機関の担当者で実施し、結果として3名に支給を決定した。

###### ▶ 夏期教職員研修

令和4年度入学生から学年進行で導入・実施する事業拠点校の新しい学校設定教科「グローバル探究」の指導力向上を目的として、7月21日の夏期教職員研修にて一般社団法人 Glocal Academy 代表理事の岡本尚也氏を招き「探究授業実践ワークショップ」を開催した。

##### c. 国の委託が終了した後も事業を継続的に実施するために計画したこと

委託期間終了後、連携校・事業協働機関との継続的なパートナーシップを築いていくために、例年協働実施している主要行事「食のサミット」「グローバル・キャンパス」等を引き続き行う。また、今年度より協働機関（SGインキュベート株式会社）と実施を開始した「アントレプレナーシップ講座」では、取り組みが一過性のものにならないよう内容を工夫検討し継続する。

なお、コロナ禍を通じてオンラインの実用化が進んだため、今後もオンラインとオフラインを適宜使い分けながら事業を進めつつ効率化を図る。

【AL ネットワークの形成】

a. AL ネットワーク運営組織の実績

本事業の構想目的・計画・達成状況及び今後の課題や方向性を確認するために、管理機関や事業拠点校の代表者、連携校の校長、事業協働機関の代表者を招集して AL ネットワーク連絡会を令和 2 年度より年度末にオンライン（一部は対面を含むハイブリッド形式）で開催している。令和 3 年度の開催実績は次の通りである。

▶ AL ネットワーク連絡会：令和 4 年 3 月 12 日（土）14:00~15:30

参加者：13 名（運営指導委員：8 名、国内連携校：2 校、海外連携校：1 校、事業協働機関：4 機関）

内容：今年度の事業総括、事業達成状況、事業の検証結果、次年度の課題と計画、質疑応答等

b. 関係機関の間で十分な情報共有体制を整備し、新たな協働事業の開発、有効な事業実施を実現したこと

AL ネットワーク内の連絡は、主として管理機関の事務局及び事業拠点校の教育開発部が、年度初めに作成したメーリングリストを用いてメールや電話、郵送等の手段で情報の共有を行っている。連絡体制としては、AL ネットワーク内に多数ある連絡先をグループ化し、かつイベントごとに担当者を決めて連絡業務に臨んでいる。また、先にも触れた年度末の AL ネットワーク連絡会では、海外の連携校や事業協働機関からも参加するため、作成資料は日英の 2 か国語標記及びアナウンスとし、事業の内容や実績についての周知を図った。

令和 3 年度は、事業協働機関の SG インキュベート株式会社が推薦した講師の方々の指導によってアントレプレナーシップ研修（前期 4 回）を実施できた。また、同社の紹介による別会社（株式会社梓書院 田村志朗氏）が選定した講師の指導によって、ワークショップを含むより発展的な研修（後期 4 回）も実施できた。これらの運営における指導計画の提示、講師の選定と決定、参加者や会場の確認、実施、結果のフィードバック等の一連の流れの中での情報共有は、管理機関の事務局と事業拠点校の教育開発部の担当者によって行われた。

c. AL ネットワークの運営組織が、当該プログラム修了生の、国際的な分野を学ぶ国内外の大学への進学や国内外のトップ大学等への進学、海外留学等の促進に寄与したこと

今年度も事業拠点校では、一部を除きほぼ予定通りに国内外の事業協働機関による学校説明会を開催し、国際的な分野を学ぶことへの進学意欲を喚起する試みを継続して行った。実施したもののとしては次の表の通りである。なお、実施はすべてオンラインである。

説明対象校	開催日時	対象	参加者数	内容
立命館アジア太平洋大学	令和 3 年 8 月 3 日（火） 15:30~16:30	事業拠点校の希望する生徒・保護者	60 名	学部・学科紹介、学費、学生生活、個別相談
ハワイ大学 KCC	令和 3 年 10 月 23 日（土） 15:30~16:30	事業拠点校の希望する生徒	42 名	学校紹介、入試のシステム、学費、渡航までのスケジュール、インターンシップ制度
マーセッド大学	令和 4 年 3 月 30 日（水） ・31 日（木） 9:00~13:00	事業拠点校の希望する生徒	— （大学HPにて直接申込）	学校紹介、体験授業、海外進学セミナー、英語レッスン、留学生や卒業生との座談会

d. AL ネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況及び本事業のカリキュラムを開発する人材の配置状況

事務局の設置及びカリキュラム開発に関わる人材配置は次の表の通りである。

区分	機関・担当者等	カリキュラム開発に関わる主な業務項目
事務局	学校法人中村学園理事長 学校法人中村学園副理事長 学校法人中村学園経営企画室長	▶ 事業計画の作成・進捗管理 ▶ AL ネットワーク内の連絡指示 ▶ AL ネットワーク全般の情報の収集・発信

		<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 事業評価の実施</li> <li>▶ 事業経費の管理・運用指導</li> </ul>
カリキュラムアドバイザー	筑波大学人間学系 准教授 國分麻里 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 事業拠点校のカリキュラム開発全般に関する指導・助言</li> <li>▶ カリキュラム検討委員会への参加</li> </ul>
海外交流アドバイザー	学校法人中村学園 経営企画室 伊東正子 氏	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 事業拠点校の留学プログラムや海外研修の企画・実施に関する指導・助言</li> <li>▶ 教育開発部会への参加</li> </ul>
事業拠点校	教育開発部員 10 名 (外国人講師 2 名を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 本事業に関わる教育実践を円滑に進めるための計画の策定と実行</li> <li>▶ 事務局への報告</li> <li>▶ 教育開発部会への参加</li> </ul>
	探究授業担当者チーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ GI クラスの探究授業の計画・実践・評価</li> <li>▶ 教育開発部への報告</li> </ul>

#### e. テーマと関連した高校生国際会議等の開催準備状況

高校生国際会議については、事業拠点校が主催する「食のサミット」を平成 29 年度より開始し、今回が 5 回目の開催（令和 4 年 3 月 12 日開催）となった。今回は前年度に続き、新型コロナウイルスの感染防止対策により、海外校はオンライン参加とした。また、例年は参加チームを国内外から広く公募しているが、今回は同様に感染防止の観点から連携校のみの参加とした。

今回のテーマは『SDGs 目標 12「つくる責任・つかう責任」につながる「食」に関する諸問題とその解決策』とし、事業拠点校及び国内連携校から 4 チーム 14 名、海外連携校から 3 チーム 15 名の生徒が参加して模擬国連形式で議論を戦わせた。また、これとは別に事業拠点校内にサテライト会場を設け、事業拠点校の GI クラスだけではなく 44 名の参加希望者やクラス代表生徒も加わり、本会場と同様のテーマで活発な議論を行った。このサミットでまとめた提言書を後日、国連 WFP 協会へ提出する予定である。次回（令和 4 年度）の開催テーマを早急に決定し、早期に準備に着手することとしている。

#### f. 社会に開かれたフォーラムや成果報告会等の実施（あるいは計画）

事業拠点校では、探究成果の報告として年 1 回の WWL 報告会を開催している。そこでは WWL 事業対象の GI クラスだけではなく、非対象生徒も含めた全校あげての一大イベントとして盛大に開催している。令和 3 年度は 12 月 11 日に開催した。新型コロナウイルスの感染防止のため、一般来賓や保護者はオンラインでの参観とした。会の前半は講堂ステージにおいて、GI クラス生徒及びアジア高校生架け橋プロジェクト留学生による発表、国内連携校 2 校の代表者がオンラインで成果発表を行った。後半は各教室において、クラス代表生徒 92 名による「食のサミット」と同じテーマでのポスターセッションを実施した。拠点校生徒約 800 名、来賓 11 名が来校し、オンラインにより学校関係者 15 名、運営指導委員 3 名、保護者 79 名が参観した。

令和 4 年度からは、事業拠点校の GI クラスが 3 年次へ進級するにあたり「GI プレゼンテーション」と称する論文発表会の開催も計画している。

#### g. 構想目的の達成に資する取り組みを計画し、その効果的かつ円滑な運営のために行った情報収集の実績

下表に今年度の実績についてまとめた。いずれも事務局の指示のもとで事業拠点校の業務担当者が実施したものである。

項目	関連機関	内容
広報紙の発行・配布	AL ネットワーク内外の機関	本事業での実践（主に特別授業や行事）に関するタイムリーな情報
連携校教員研修会への発表参加	京都先端科学大学附属高等学校	探究授業実践の報告及び指導法の情報交換

連携校授業研究会参加（個別懇談会参加）		本事業の効果的な運営のための情報収集（特に留学プログラムについて）
学校視察のための事業拠点校来校	高知県立高知西高等学校	事業の説明、運営に際しての情報交換、学校設定教科の運用に関する質疑応答
AL ネットワーク内の諸連絡・調整	AL ネットワーク内の全機関（特に国内連携校）	主に行事の相互参加に関する連絡・調整等

h. AL ネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書等

該当無し

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和3年5月11日～令和4年3月31日）												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
教員チームのコーチング	1・2年「GI探究」指導												
	3年論文作成指導												
	論文集完成・配布												
学校説明会・入試講座の開催		31日 中村大・短大	7・11日 中村大・短大		3日 立命館アジア太平洋大		23日 ハワイ大学 KCC		11日 中村大・短大		25日 中村大短大部	8日 中村調理製菓専門学校・国際ホテル専門学校 30・31日 マーセッド大学	
留学・海外研修の奨励			18日 説明会	申し込み・研修参加									
食のサミット開催				実施内容告知	連絡・調整						9・10日 事前会議	11・12日 実施	
連携校への行事参加 *KUAS=京都先端科学大学附属高等学校			6日 KUAS 探究講演		23日 KUAS 職員研修			16日 KUAS 授業研究発表会	19日 九州大学成果発表会	25・26日 KUAS 研究成果発表会等		12日 高知西高校探究成果発表会	
連携校からの行事参加・来校			22日 生物実験(カズベキスタン)					30日 視察(高知西高)	11日 WWL 報告会(国内連携校)			11・12日 食のサミット(全連携校)	
WWL 報告会開催					参加連絡・調整				11日				
広報誌の発行・配布		27日					27日						
ホームページ更新	←→												
GI クラス の 開 発 ・ 実 践	GI 探究		3日 産学連携		2日 糸島フィールドワーク		21日 論文作成ガイダンス	11日 産学連携	2日 産学連携	11日 学外指導者論文指導打合せ		25日 学外指導者による論文指導	
	GI フィールドワーク Basic		事前準備・調整			15日 実施	事後の取り組み						
	GI フィールドワーク Advance						国内研修に変更・延期決定	行程練り直し		行程詳細の決定	事前準備	21日 ～25日 実施	
	GI 留学プログラム			17日 説明会 28日 アンケート		4日 説明会		6日 説明会		12日 説明会 17・26日 ガレージセッション 28日 出発	4月3日 渡航 帰着予定		
	GI スキルアップセミナー	前期 実施準備	5・10日 セミナー	1・29日 セミナー				後期 実施準備	13日 セミナー 18日 ワーク ショップ	24日 セミナー	7日 セミナー		



グローバル探究の開発		25日 カリキュラム承認	教科内容・指導計画の検討								14日 教科内容 計画承認	
カリキュラム検討委員会開催	27日	27日		7日		29日	27日	24日	22日		22日	
教育開発部会開催	3回	3回	4回	2回	1回	3回	3回	2回	3回	3回	3回	1回
指導指標の測定				15-27日 測定		フィード バック			17-21日 測定	フィード バック	24-28日 測定	フィード バック
APの受講			受講 受付			受講					単位取 得認定	
GI講座の開催							2日 講演			31日 講演延期		
高度内容の取り組み			22日 生物実験							ハイレベル英語講座		
留学生の受け入れ						アジア架け橋留学生受け入れ						
教育研修実施				21日 職員研修							探究授業実践学習会	
事業効果検証アンケート			実施	データ 分析							実施	データ 分析

## (2) 実績の説明

### a. 設定したテーマについて

本事業では『「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成』をテーマとして掲げている。SDGsにおいては「社会」「環境」「経済」という3つの側面で開発目標をバランスよく統合した形で設定しているが、私たちはこれらに食生活の改善や飽食・貧困の問題に関わる「栄養」の側面を加えるとともに、食の文化的側面を「社会文化」として含む形で解決すべき社会課題を捉えている。すなわち、本事業では、テーマとして設定する「食」について、「食と社会文化」「食と環境」「食と経済」「食と栄養」の4領域からなるものとしている。生徒たちがこれらの4領域を探究的かつ問題解決的に取り組むことで、世界の食問題について必要な知識をバランスよく習得でき、諸活動における探究の過程においてイノベティブなグローバル人材として必要な基礎力が養われると考えている。

### b. カリキュラム研究開発を国内外の大学、企業、国際機関等との協働で行ったことについて

#### ① 1・2年次「GI探究」における産学連携（企業コラボ）

GIクラスの1年次には食の4領域をPBL形式で実施しているが、「食と経済」の領域においては地元企業と協働してSDGsの課題解決を図る商品開発を行っている。令和3年度は新型コロナウイルス感染症の拡大のため、2年GIクラスが進めてきた株式会社博多大丸との商品開発は途中で断念したが、1年GIクラスが例年より早くこの取り組みを開始しており、新商品の早期完成が期待される。以下、令和3年度の取り組みの主なものをあげる。

実施日	対象	協働機関	内容
令和3年6月3日（水）	2年GI クラス	株式会社博多大丸	地域社会との共生、起業としてのSDGsへの取り組み等の説明（オンライン実施）
令和3年8月2日（月）		二丈ふれあい交流センター、糸島市役所	商品開発に向けた情報収集（現地でのフィールドワーク）
令和3年11月11日（木）	1年GI クラス	株式会社石村萬盛堂	製菓業界について、商品のコンセプト、商品開発の進め方等の説明
令和3年12月2日（木）			商品アイデアについてのグループ発表・質疑応答・審査

#### ② 2年次「GIスキルアップセミナー」における起業家養成プログラムの開発

イノベティブなグローバル人材を育成するため、令和3年度は6～7月（前期）と12～2月

(後期)に分けて「GIスキルアップセミナー」としてのアントレプレナーシップのセミナーを企画し、前後期で各4回ずつ計8回を実施した。前期は事業協働機関であるSGインキュベート株式会社との協働、後期は株式会社梓書院との協働で実施した。前期は、2年GIクラス生徒全員を対象として「起業とは何か」「起業家の特長」などへの気づきを得るための基礎講座とした。また、後期は、中学3年から高校2年までの希望者を対象とし、「起業するための準備(マインドセット、目標、経営的側面等)」の習得を主題とし、ワークショップ1回を含む発展講座とした。以下、実施した各回のリストを表に記す。

期	回	実施日	講師	テーマ・内容等
前期	1	令和3年6月5日(土)	SGインキュベート株式会社 代表取締役社長 相川洋氏	起業とは何か、会社の概要、今後の予定等
	2	令和3年6月10日(木)	五感応用工学研究所 代表 松岡真輝氏	ニオイに関してよりよい社会を創る
	3	令和3年7月1日(木)	株式会社neuet 代表取締役 家本賢太郎氏	レンタル自転車サービス「Chari chari」の起業と運営
	4	令和3年7月29日(木)	株式会社メロディ・インターナショナル 代表取締役 尾形優子氏	遠隔医療サービスの起業と運営
後期	1	令和3年12月13日(月)	うきはの宝株式会社 代表取締役 大熊充氏	ばあちゃん食堂が世界を変える
	2※	令和3年12月18日(土)	ディサント株式会社 キーアカウントマネージャー 吉村友見氏 ピンサリア・ピンサ・ロマーナ マリノアシティ店 店長 松井淳史氏	食文化の広がりについて考えてみましょう～イタリアの新しいピッツァ「ピンサ・ロマーナ」の事例～
	3	令和4年1月24日(月)	NPO法人いるか 理事長 田口吾郎氏	「経済格差」により「学力格差」が生まれない世界を創る
	4	令和4年2月7日(月)	株式会社 明治 業務部コミュニケーション課 藤原理佐氏	チョコレートセミナー

※ 後期第2回はワークショップ形式で実施、他はすべてセミナー形式

c. 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行うグローバル探究等の教科・科目を設定した状況について

事業拠点校のGIクラスでは、英語の中で「英語探究」の科目を設け、英語を用いて文理融合的な内容(主として「食」に関わるテーマ)について探究活動を実践している。1年次は課外授業扱いで1単位相当、2・3年次は正規の授業として各2単位を設定している。この「英語探究」では、「GI探究」で習得した探究活動のノウハウを活用し、探究活動を英語で学習するものであり、英語によるレポートや論文の作成法・ディベート・発表方法等を扱う。また、オンラインで海外との交流活動も実施しており、今年度は1年GIクラスが台湾(6月3日・23日、12月17日)や韓国(7月13日)等の高校生と社会課題とその解決法等について意見交換を行った。GIクラスでは外国人講師が副担任を務めているため、これらの授業に関わらず日常から英語を用いた指導を行っている。

令和4年度入学生からは、これまで「総合的な探究の時間」の一部として実施してきた「GI探究」に換わり、新たな学校設定教科として「グローバル探究」を全クラスに導入することを5月の職員会議で正式に決定し、教育開発部を中心に教科内容や実施計画等の検討を進めている。

**d. 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて実施したこと**

**① GI 留学プログラムの実施**

事業拠点校では、グローバルでイノベーティブな人材育成のために欠かせない英語運用能力の育成を目的として、1年 GI クラスの希望者が3学期に約2か月間の留学プログラムに参加できるシステムを令和2年度入学生より開始した。このプログラムに参加する場合の1年次成績は、2学期末までの評価で算出し、留学中の成績（現地での学期の全日を登校できないため成績・評価は出ないことが多い）は含めないことにしている。令和2年度は、渡航先のカナダ・オンタリオ州トロントが新型コロナウイルス感染症拡大のためロックダウンとなってしまう、実施ができなかった。しかし、令和3年度は大阪でのビザ取得や渡航直前及び現地カナダでのPCR検査、入国時のホテル一時待機等いくつかの障害はあったものの、参加者13名の全員が無事に渡航し、令和4年1月28日（金）から4月3日（日）までの予定で留学生活を送っている。

**② GI フィールドワーク Advance の実施**

事業拠点校の2年 GI クラスでは、探究活動で培ってきたスキルを国内または海外の実習地で活用し課題解決を図る「GI フィールドワーク Advance」を9～10月に計画している。令和3年度は海外（東南アジア）での研修を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため実習地を国内に変更し、時期を令和4年3月に延期したうえで実施することを決定した。令和4年1月に新たな行程を正式に決定し、同年3月21日（月）～25日（金）に九州内で実施した。内容は、可能な限り海外フィールドワークと同様の探究活動や課題解決、留学生との交流による英語の使用等を取り入れ工夫したものとした。また、異文化交流や英語運用力を試行する機会を補充する目的で、令和3年12月27日（月）にはシンガポール国立大学（NUS）の学生とのオンライン交流を実施した。

**e. 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて**

事業拠点校の教育開発部において、令和4年度入学生の2・3年次への進級時に一部選択制を導入するカリキュラム案を作成した。文系・理系の区分にとらわれず、生徒の興味・関心に応じた科目を選択できるシステムであり、具体的には金曜日の午後の1～2単位分を充当する形を提案した。選択できる開講講座の例は次の表の通りであるが、結果としては時間割作成に関する教務部との調整がつかず、令和3年度内の決定は見送られ、次年度へ審議が持ち越しとなった。

目的	講座例（仮称）
生徒の興味関心を深める	古典探究、日本史探究、数学探究
正課の授業では学ぶことができない内容	哲学入門
実験	物理実験、化学実験
実技実習	芸術（音楽・美術・書道）実習、被服実習、情報処理、英会話
進路実現・検定取得	総合型選抜対策講座、英語検定講座
大学レベルの授業（AP）等の高度な学び	経済学入門、心理学入門

**f. 学習活動が構想目的の達成に資するよう工夫したこと**

より多くのイノベーティブなグローバル人材を輩出するためには、できるだけ事業拠点校内だけの閉鎖的な枠組みにとらわれることなく、外部に「開かれた」教育手法を用いて、生徒たちに本物に触れさせ刺激を与え、体験的に視野の広がりや発想力を促すことが必要と考えている。昨今のコロナ禍でオンラインによる教育実践が増加している現状を考えると、なお一層その必要性を痛感している。そこで、GIクラスのみ実施予定であったアントレプレナーシップのセミナーをWWL事業の非対象生徒の希望者にも受講が可能となるようにした。そうすることで、事業拠点校のより多くの生徒が起業家から直接話を聴く機会が増え、より多くの生徒の変容を期待したのである。（上記b. ②にも関連事項参照）

また、令和3年度は2年 GI クラスの論文作成の指導に関して、事業拠点校内の教師による指導だけではなく、運営指導委員の一部や外部の有識者（以下、学外指導者と称する）も定期的に

指導にあたることで、生徒の活動意欲を高めるとともに論文の質的向上を図ることをねらいとした取り組みを行った。始めに12月11日（土）に学外指導者へ指導の目的や方法の概要説明を行った後、2月25日（金）に第1回目となる論文指導を実施した。当日は5名の学外指導者が来校され、2年GIクラス生徒33名がグループに分かれ論文テーマに関する個人発表の後、指導者から個別に指導・助言を受ける機会を持った。令和4年度より本格的に開始する「GIプレゼンテーション」と称する論文発表会へ向けて、このような機会を継続して設ける予定である。

#### g. 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取り組みを実施したこと

管理機関である学校法人中村学園では、事業協働機関である中村学園大学・中村学園短期大学の学生以外で講座を履修する者を「科目等履修生」と称し、在学生と同じ授業科目を受講して定期試験等で学期末に成績評価することになっている。また、そこで単位を取得した生徒が中村学園大学または同短期大学部に進学した場合は、習得単位として認定される仕組みとなっている。この制度は令和3年度で開始から3年目となるものであり、事業拠点校及び事業連携校の中村学園三陽高等学校の高校2年生の希望者を対象として実施している。

令和3年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、試験及び評価はすべて授業内での試験、レポート、小テスト、課題等によって行われた。また、講座の受講登録、諸連絡、課題提出等のほとんどはオンラインによって実施された。事業拠点校からの受講者は19名で、各自1科目（2単位）を受講し、全員が単位を修得した。

#### h. より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境を整備したこと

##### ① 海外連携校との合同生物実験

高校での教育内容を越えて深く専門的な知識・技能を身に着けるための取り組みであるこの生物実験は、今回で3回目の実施となった。毎回、理系「生物」の選択者や希望者を対象として、身近な食材を用いて専門的な解剖実習を行っている。今回は教材として「いりこ」を使用した。参加生徒は9名、教員4名であり、講師は事業拠点校の教員が務めた。また、国内外の連携校にも参加を呼びかけたところ、ウズベキスタンのライシーアム高校の生徒20名と教員6名がオンラインで参加し、リアルタイムで講師による解説を聴きながら同様の実験を行った。

##### ② CEFR B1・B2 レベル突破講座

令和2年度までは「実用英語技能検定準1級講座」を実施してきたが、これに代わるものとして令和3年度よりこの講座を開始した。講師は事業拠点校の教員が務め、令和4年1月17日（月）～2月25日（金）までの全6回（各回90分）で実施し、生徒56名が参加した。新型コロナウイルス感染症拡大のため、オンラインでの実施となった。

##### ③ アントレプレナーシップセミナー（後期） ※上記b②の項を参照

この研修は拠点校のGIクラス生徒にイノベティブな能力の涵養を目的とした「GIスキルアップセミナー」の一環として計画していたが、GIクラスの生徒に限定せず「起業」に興味・関心のある生徒に参加を呼びかけ、意欲のある参加者がより専門的な講話を聴くことで、一人でも多くのイノベーターを生み出そうとした試みである。令和3年度は12月13日（月）から2月7日（月）までの間に全4回を実施し、中学3年生から高校2年生までの生徒のべ46名が受講した。

#### i. アジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる人材を受け入れ、留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制を整備したこと

事業拠点校では、平成30年度のアジア高校生架け橋プロジェクトの開始から令和3年度までの4年間でべ15ヵ国33名の留学生を受け入れている。令和3年度は10ヵ国10名を受け入れ、9月21日（火）から翌年3月13日（日）までの滞在期間中、1年生の各クラスに1名ずつ配属した。留学生たちは各クラスでの授業参加はもちろんのこと、全校集会や学年集会、食のサミット等の行事、GIクラスの探究授業にも積極的に参加し、在校生との異文化交流を深めるとともに、英語を用いて出身各国の現状や課題についての発表やディスカッションを行った。また、教育開発部の担当教員や海外交流アドバイザーによる日本語や生活指導も組織的・計画的に行った。事業拠点校では寮を備えているため、留学生は寮での集団生活における規律やマナー等も学んでいる。寮内の留学生を対象とした新型コロナウイルス感染症の予防や拡大防止へ向けた対策、

受け入れ規定の改正等にも取り組み、受け入れの体制を整備した。冬休み（例年は夏休みも含まれる）には、日本文化により親しんでもらうことを目的として、在校生からホストファミリーを募り、それらの家庭で年末年始を過ごす機会を設けている。

## j. その他について

### ▶ 夏期海外研修業者説明会の開催

事業拠点校では、海外研修や留学プログラムがカリキュラムに組み込まれているのは現在のところ GI クラスだけである。そこで他のクラスの生徒にも、できるだけ多くの海外研修の機会を提供し、多くの生徒の視野を広げることを目的として、初めての夏期海外研修業者説明会を 6 月 18 日（金）に開催した。当日は 4 社の旅行業者が企画した研修プランを参加者へプレゼンし、興味・関心を持ったプランについて、別室に設けた各社のブースでの相談を経て、最終的には後日に参加申し込みを行うという流れで実施した。各企画については、あらかじめ事業拠点校の教育開発部や海外交流アドバイザーの意見を取り入れ、選定した企画をプレゼンしていただいた。コロナ禍であったために、海外渡航のプランは 1 つだけにとどまり、他は県内または自宅でのオンライン研修となったが、生徒・保護者の関心は高く、説明会には生徒 103 名と保護者 53 名が参加し、そのうちのべ 25 名が実際の研修に参加した。

### ▶ Blue Earth 塾の開催

NPO 法人 Blue Earth Project が主催する年 2 回の環境イベントに、事業拠点校の GI クラスが参加した。このイベントを通して生徒たちの身近な環境問題解決への意識の向上を図るとともに、課題解決力、表現力、創造力、コミュニケーション力、多様性受容力等の様々な力が養われた。各回の実施内容は次の通りである。

○11 月 6 日（土）…事業拠点校にて対面実施（1・2 年 GI クラス 74 名が参加：指導学生 15 名）

エコレクチャー、衣食住に関する課題解決・ディスカッション等

○1 月 29 日（土）…オンラインで開催（2 年 GI クラス 33 名が参加、松蔭高等学校・藤女子高等学校からも参加） 実践報告、環境問題解決への情報交換、エコバッグづくり

## 8 目標の進捗状況、成果、評価

### a. イノベーティブなグローバル人材の育成状況

〔WWL 事業効果検証アンケートの結果から〕

事業拠点校では毎年 2 回の事業効果検証アンケート（各回 32 問）を全生徒に実施している。令和 2 年度後期の調査から本事業で育成するイノベーターに必要な力に関する設問（前後期で計 20 問）を新たに作成し、調査を実施している。各設問について力が身につけていると肯定的な回答をしている生徒の割合（%）を下の表に示す。

単位 (%)		イノベーターに必要な力に関する設問					育成するすべての力に関する全設問平均
学年・クラス	調査時期	突破力・忍耐力・レジリエンス	調和力	マインドセット	高次の課題解決力	平均	
1 年 GI	前期	75.7	89.5	63.2	85.2	77.8	75.9
	後期	67.7	91.7	83.3	75.0	72.2	83.1
1 年 GI (R2)	後期	69.7	92.4	77.3	72.8	76.4	80.0
1 年他クラス	前期	79.7	87.8	65.6	84.5	79.4	70.1
	後期	68.7	89.4	79.7	74.1	76.1	78.2
2 年 GI	前期	87.5	93.8	84.4	87.5	88.1	82.0
	後期	63.3	90.9	71.2	63.6	66.8	77.0
2 年他クラス	前期	81.9	86.5	70.1	83.9	80.8	70.9
	後期	70.7	91.4	76.9	75.5	77.1	77.3

※ 調査時期：前期 6 月、後期 2 月 1 年 GI のみ令和 2 年度後期の調査結果を比較参考として付記した。事業拠点校では、グローバルリーダーとして必要な力に加え、イノベーターに必要な力とされる力を次のように定義している。

- ▶ 「突破力」…大きな壁（課題）にぶつかっても、諦めることなく論理的な思考で乗り越える力。
- ▶ 「忍耐力・レジリエンス」…得られた知識を活用しながら様々な手法を試行し、失敗の経験を生かして次の

改善につなげ、答えのない問題にも諦めずに取り組む意欲や態度。

▶「調和力」…国内外の人とのつながり・協働にとどまらず、新しい知識と既存の知識・自己の経験と他者の経験等を結びつけて協働する力。

▶「マインドセット」…自分の可能性を信じ粘り強く努力することで、自己の能力が発達し、持続可能な社会が実現するという考え方。

▶「高次の課題解決力」…答えのない課題や予測不能な事態に対して、いち早く的確に状況を察知・観察し、核心をつき問いかけを何度も行い、それに合う最適な方法でプロジェクトを企画・実行し、状況に応じた最適解を導くために必要な力。

この結果より、次のことが考察できる。

- ▶ 1年 GI クラスに関しては、イノベーターに必要とされる力が身につけていると肯定的に捉えている生徒は、他のクラスに比べて大きな差はない。（前期で 1.6、後期で 3.9 ポイントの差である。）また、本事業で育成するすべての力については、両クラスの差は 5 ポイント程度であるが前後期の伸びが 7～8 ポイントと大きくなっている。以上のことから、1 年次にはイノベータティブな力を身につける主だった行事や活動が少なく、「GI フィールドワーク Basic（グローバル・キャンパス）」等のグローバルリーダーとしての力を養成する行事が主であったためであると考えられる。
- ▶ 2年 GI クラスに関しては、イノベーターに必要とされる力が身につけていると肯定的に捉えている生徒が、前期では他クラスよりもかなり多い割合であった。しかし、後期では前期の値からの減少幅が他クラスに比べて大きくなっている。また、1 年（令和 2 年度）の時の結果と比較しても、やや減少傾向にある。これらの要因としては、コロナ禍により対面実施がオンライン実施に変わるなど、予定通りに授業や行事が行われなかったことが大きな影響を与えていると考えられる。特にこの学年は、昨年度に渡航先がロックダウンになったため留学プログラムが実施できず、加えて今年度の海外フィールドワークも国内へ変更・延期を余儀なくされた。しかも、アンケートを実施した 2 月下旬の時点では、未だフィールドワークを実施していない状態であった。これらのことから、本事業において身についたであろうと期待するイノベーションスキルを発揮する機会が与えられず、力が身についたと肯定的に捉えることができなかったということが推測される。3 月下旬の国内フィールドワークを体験した後に、生徒たちの意識がポジティブに変容することを期待したい。

#### 〔GI スキルアップセミナー（後期）の実施とその結果から〕

令和 3 年度は、6・7 月（前期）と 12～2 月（後期）にイノベータティブな能力の涵養を目的とした「GI スキルアップセミナー」を実施した。特に後期においては、アントレプレナーシップを養成する講座として開催した。各回の生徒たちによる受講後の振り返りの記述内容を分析すると、受講を通じた生徒の変容として読み取れる主な事柄は次の通りである。

▶ 起業家の事業は、思いつかないような特別な取り組みではなく、日常の素朴な疑問や生活の中に存在する様々な課題の解決へ向けての取り組みであること。また、起業家の取り組みの手法は、生徒自身がこれまで行ってきた探究活動の方法と似ているということ等に、参加した多くの生徒たちは気づくことができた。特に身近な事柄に対して問いを立てて批判的に思考する力が身につけてきていることを実感しているようである。

▶ 様々な分野の起業家に共通する特徴（突破力や忍耐力、調和力、課題解決力等を持つこと）や起業することの難しさを知ると同時に、「自分たちでもできるかもしれない」という自信を深め、自己実現の可能性を実感しているようである。

#### 〔英語力測定の結果から〕

高い英語力もイノベータティブなグローバル人材には必要な能力の一つと考えている。下の表は、令和 3 年度の英語能力検定試験の受検による CEFR の各レベル達成者数と達成率を示したものである。これによると、WWL 対象生徒である GI クラス生徒は、3 年生までを含む WWL 非対象生徒に比べて遜色のない結果と言えるが、決して高い値とはなっていない。これにはいくつかの要因が考えられるが、その一つは令和 2 年度の GI 留学プログラム、令和 3 年度の海外研修が実施できなかった点である。英語を学ぶ意欲の面で強い動機づけが期待できる留学や海外研修の効果が見られなかったことは非常に残念である。また、令和 3 年度 GI クラスの 1 年生は留学プログ

ラムに参加しているため、検定試験を受検できていないことも要因と考えられる。生徒個々の英語力強化へ向けて、英語を用いた探究学習やオンライン英会話等の実施という様々な工夫を試みているが、この結果を受けて学習法・指導法の更なる改善を図らねばならない。

	対象人数	CEFR A2	CEFR B1	CEFR B2
WWL 対象生徒 (1・2年 GI クラス)	74	55 (74.3%)	6 (8.1%)	0 (0%)
WWL 非対象生徒 (1～3年他クラス)	1084	486 (44.8%)	123 (11.3%)	14 (1.3%)

#### b. ALネットワークが果たした役割

区分	主な役割
管理機関	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶事業全体の進捗状況を管理し、事業拠点校への指導を行った。</li> <li>▶AL ネットワーク内の連絡・調整及び事業に関わる各種委員会を開催した。</li> <li>▶必要経費を管理し、適切に執行した。</li> </ul>
事業拠点校	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶「GI 探究」を実践し、「グローバル探究」の教科内容の開発・指導計画の策定を行った。</li> <li>▶「WWL 報告会」「食のサミット」を企画し、開催した。</li> <li>▶事業連携校の行事に相互に参加し、成果報告及び情報交換を行った。</li> </ul>
事業連携校	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶事業拠点校の探究活動・成果報告会・国際会議へ相互に参加した。</li> <li>▶研究開発に関する情報交換を積極的に行った。</li> <li>▶AL ネットワーク連絡会で事業拠点校の事業の進捗に関して助言した。</li> </ul>
事業協働機関	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶〔全ての機関〕 AL ネットワーク連絡会へ参加した。</li> <li>▶〔立命館アジア太平洋大学〕 「GI フィールドワーク Basic」で研修スタッフとなる学生を派遣した。</li> <li>▶〔中村学園大学・中村学園大学短期大学部〕 事業拠点校及び中村学園三陽高校の2年生を対象として科目等履修生制度(アドバンスト・プレイスメント)を実施した。</li> <li>▶〔SG インキュベート株式会社〕 探究活動・アントレプレナーシップセミナーへの講師を派遣した。</li> <li>▶〔九州大学共創学部等〕 学外指導者として GI 生徒の論文作成の指導に携わった。</li> <li>▶〔ハワイ大学 KCC 等〕 学校説明会等を開催し、生徒・保護者に対する進学準備の相談等に当たった。</li> </ul>
カリキュラムアドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶カリキュラム検討委員会へ参加し、事業拠点校の主要行事の企画と実施、「GI 探究」の実践、「グローバル探究」の教科内容や指導計画等、カリキュラム全般に関する指導・助言を行った。</li> </ul>
海外交流アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶「GI 留学プログラム」の円滑な実施へ向けて参加希望者を支援した。</li> <li>▶留学支援金の授与対象者の決定等について管理機関と連絡・調整を行った。</li> <li>▶夏期海外研修プログラムについて旅行業者と共同で企画・調整を行った。</li> <li>▶海外連携校の「食のサミット」の参加へ向けて連絡・調整を行った。</li> </ul>
その他(事業協働機関以外の大学、企業等)	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶〔株式会社博多大丸、株式会社石村萬盛堂〕 産学連携事業の一環として事業拠点校と協働し、商品開発等を行った。</li> <li>▶〔株式会社梓書院等〕 SG インキュベート株式会社と連携し、「GI スキルアップセミナー」の企画と実施を支援した。</li> </ul>

#### c. 短期的・中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況

次の表に本事業の構想計画書に記載した8項目(①～⑧)について短期・中期・長期の目標をあげ、それぞれの項目の下段に進捗状況を記した。

短期目標（1～3年以内）	中期目標（3～5年以内）	長期目標（5～7年以内）
① 教科横断型教科及び文理融合カリキュラムの設定		
学校設定教科「グローバル探究」の施行・改善、文理融合カリキュラムの実施	学校設定教科「グローバル探究」の英語運用による活動の定常化	共通の学習内容・指導法のもとで「グローバル探究」の全クラス・全学年での実施
〔進捗状況〕 令和4年度からの「グローバル探究」の施行に向け、教科内容・指導計画の概要を決定し、教員研修や学習会を通じて実践力の育成を行った。文理の区分に関係なく、生徒の興味・関心に応じた科目選択が可能なカリキュラムに関しては、原案は作成済みであるが次年度へと決定は見送りとなった。		
② 留学・海外フィールドワークのカリキュラム化（オンラインでの実施を含む）		
研修先の開拓・開発（3カ国、3ヶ所以上）、留学プログラム（期間選択制）の施行・改善	研修先の開拓・開発（5カ国、5ヶ所以上）、校内他クラスの留学プログラム実施	研修先の開拓・開発（5カ国、10ヶ所以上）、長期留学プログラム（1年間）の実施
〔進捗状況〕 留学プログラムについては、令和3年度にカナダへの約2か月間の日程で初めて実施できた。プログラム終了後に今回の課題と反省をふまえ、次年度に生かしたい。 海外フィールドワークに関する研修先の開拓・開発は、新型コロナウイルス感染症の拡大により進んでいない。ただし、オンラインでの研修実施はシンガポール国立大学（NUS）の学生と令和3年12月に実施した。海外渡航が困難な場合に備え、今後もオンラインで研修を実施する場合の研修先の選定等の検討を進める。また、令和3年度の海外研修は国内に振り替えて実施した成果を生かし、国内での研修先の開拓・開発も進めていく。		
③ 留学生との探究活動（オンラインでの実施を含む）		
留学生と協働した活動プログラムの完成及び施行・改善	留学生の母国との交流を含めた探究活動の実施	交換留学を通じた双方向の探究プログラムの構築
〔進捗状況〕 アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生を迎えて4年目となる令和3年度は、コロナ禍による予定変更等の影響は多少あったものの、留学生へ向けた新型コロナウイルス感染症の対応マニュアルの作成等を行い、受け入れと諸活動に関するプログラムの完成度を上げることができた。今後は、令和2年度に実施したような、留学生の母国との交流（中期目標）も活発化させたい。		
④ 国際会議の開催（オンラインでの実施を含む）		
拠点校で開催する連携校の参加する定例国際会議「食のサミット」の実施	連携校での「食のサミット」または食に関連する国際会議の開催・連携校の参加	海外連携校での「食のサミット」または食に関連する国際会議の開催・連携校の参加
〔進捗状況〕 令和2年度に続き、コロナ禍にあって対面とオンラインを併用するハイブリッドの実施となったが、これまで培ってきた技術的なノウハウを生かして無事に「食のサミット」を実施することができた。本会議だけではなく、一般生徒も数多く参加できるサテライト会議も参加者が増えて充実した内容となってきたため、次なるステップ（中期目標）としての事業連携校での開催の可否検討も視野に入れ、次年度に向けて取り組んでいきたい。		
⑤ ALネットワーク連携の質的向上と拡大		
福岡県内のベンチャー企業と連携	国内外で活躍するベンチャー企業と連携	ALネットワーク内で計30団体以上と連携
〔進捗状況〕 令和3年度は福岡県内のベンチャー企業との連携は行っていないが、「GIスキルアップセミナー」の開催により、県外のベンチャー企業数社の協力でアントレプレナーシップの養成が実施できた。次年度はこのセミナーを継続しつつ、県内のベンチャー企業とも連携し、ALネットワークへの新規参加の要請を検討する。		



⑥ 高大連携及び大学課程の早期履修（APプログラム）、大学講座の配信		
併設大学・短期大学部への入試における多面的評価システムの完成、現地参加型 AP プログラムの完成及び施行・改善	AP プログラムの受講可能講座数を事業開始時の3倍以上に増加、ICTを用いたライブ講義や講義動画の提供を開始	連携校への AP プログラム導入に向けた試行・改善
〔進捗状況〕 多面的評価に関しては、従来の評価項目に AP プログラムの参加や単位取得状況を加えた形で実施した。AP プログラムに関しては、コロナ禍にありオンラインでの実施になったが、実施3年目になりプログラム自体はほぼ完成したものが整備できている。中期目標にある講座数の増加は、事業拠点校の生徒は限られた時間の中での受講となるため、検討・調整には時間を要すると思われる。		
⑦ 国内外トップ大学への進学・起業家の輩出 ※開発するカリキュラムによる卒業生の輩出後からの期間として		
国内10名・海外5名以上進学 起業家1名以上	国内15名・海外7名以上進学 起業家3名以上	国内20名・海外10名以上進学、 起業家5名以上
〔進捗状況〕 令和3年度はGIクラス1期生が2年生であるため、次年度末の結果が待たれる。できるだけ早期に短期目標を達成できるよう、生徒を励ましながらか教員も共に学び日々成長していきたい。		
⑧ 教員向けの教育研修・セミナーの実施（オンラインでの実施を含む）		
国内外の連携校との合同研修会や情報交換会の実施	地域（県内または九州内）を包括したグローバル・イノベーション教育セミナーの開催	AL ネットワーク全体を包括した国際的な教育セミナーの開催
〔進捗状況〕 教員を対象とした事業連携校との合同研修については、実施計画案はあったものの、令和3年度は開催を断念した。8月23日（月）には事業拠点校の教員1名が事業連携校である京都先端科学大学附属高等学校の教員研修会に参加し、探究活動の実践報告を行った。		

## 9 次年度以降の課題及び改善点

### ▶ 本事業に関する管理機関の課題や改善点

コロナ禍を通じてオンライン実用化を図れたものの、AL ネットワーク内での連携校・事業協働機関との連携をさらに充実させていくために、オンラインとオフラインを併用しながら取り組み内容を検討する必要がある。また、取り組みが一過性のものにならないよう、継続的・長期的な連携を行うことを目的としAL ネットワーク内での整備を行い、新たな連携先の開拓も検討する。また、拠点校との連携を綿密に図り情報共有を行い、実施状況を確認し適宜助言を行う。

### ▶ AL ネットワークの課題や改善点

令和3年度は、連携校相互の行事参加や授業の実施等でより活発な取り組みができた。次年度は、それと同等以上の取り組みを行っていく。事業協働機関については、コロナ禍ということもあり、協働する取り組みを実施できていない機関がいくつかあるが、これまでより相互の連絡をより密に取りながら、協働して事業を進めていきたい。また、どうしても年度末に事業拠点校の行事（卒業式、文化祭、食のサミット等）や本事業関係の会議（運営指導委員会、AL ネットワーク連絡会等）、報告書の作成等が重なり多忙を極めるため、抜本的な年間計画の見直しも行う必要があると考えている。

### ▶ 研究開発にかかる課題や改善点

令和3年度も海外研修が新型コロナウイルス感染症拡大のために中止となり、国内研修へ変更を余儀なくされたために、研修地の開拓ができなかった。今後も、海外渡航は困難であることが予測されるため、国内の研修でも生徒たちがイノベーションスキルを試行できる研修地の開拓と研修成果の評価基準（ルーブリック等）を開発していかねばならない。

令和4年度はGIクラス3年目の集大成の年となる。研究成果を披露する論文発表会にあたる「GIプレゼンテーション」の初めての開催とその成功へ向けて、まずは生徒たちの論文作成の質的向上を図る取り組みを継続していかねばならない。これまで実施してきた学外指導者による論文指導を今後も計画的に取り入れていく予定である。また、探究活動の成果を最大限に使い、国内外のトップ大学への進路実現やイノベーターの誕生にまで到達できるよう、指導法及び実践の研究を続けていく。

さらに、新しい学校設定教科「グローバル探究」の学年進行での開始にあたり、学年団の教員の共通理解を図り、計画的で着実な実践を目指すことで、生徒たちの成長を促していく。

**【担当者】**

担当課	教育開発部	T E L	092-831-0981
氏 名	平田 晃己	F A X	092-831-0985
職 名	教育開発部 部長	E-mail	hirata@njh.ed.jp